

# 流通の課題

②

東日本大震災で約千人の犠牲者が出た宮城県東松島市。市内を流れる鳴瀬川の河口近くで、畳店を営む山縣進さん(72)に会った。

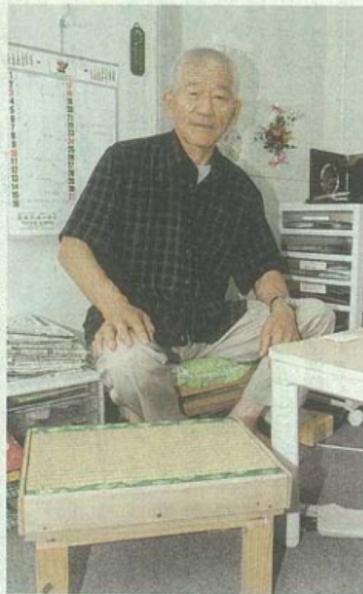
「この集落は133世帯のうち100世帯が家ごと流された。生き残っているのが不思議なくらいだ」。山縣さんも津波に襲われ、妻善子さん(88)と玄関のげた箱に上がり、天井までわずか15センチの隙間で呼吸をつないだ。

現在は、辛うじて残った作業場に中古の機械を入れ、午前4時半から畳を縫う。大半は浸水などの被害を受けた畳の張り替えで、住宅の建て替えや仮設住宅用の注文はない。

## 岐路に立つイ草

第2部

「浸水被害を受けた畳の張り替えで忙しい」と話す山縣進さん。自らが暮らす仮設住宅はクレーのカーペット敷きのままだ。7月28日、宮城県東松島市



## 仮設住宅①

自らが暮らす仮設住宅も会議室にあるようなカーペット敷きだ。「床にそのまま寝るよつなも。座るとチカチカする」と善子さん。山縣さんは「本当は自分の部屋に畳を入れて、お客さんに畳の良さを教えたいけど、なかなか暇がなくて」と笑った。

宮城県内の畳店134軒が

加盟する畳業商工組合の今野義雄理事長(63)は「宮城県の仮設住宅で、初めから畳が入っているところはゼロです」と言っていた。息をついた「薄いかーベットが敷いてあるが、暖かい所とこっちみたいに寒い所が一緒ではない。今はまだいいが、冬になったらどうなるか…」

# 「畳が欲しい」入居者切実

菅政権が急ピッチで進めた仮設住宅建設。国土交通省によると、宮城県内では約2万2千戸を建設予定で、9月1日現在の完成率は96%。しかし、床はカーペット。入居者からは畳を望む声が多い。

7月23日、東松島市で復興を祈念する夏祭りがあり、被災者に自転車や食器などの生活物資が贈られた。その一環で、市は八代市と永川町が送った半畳畳のうち600枚を、半畳以上の被害を受けた被災者に1人4枚ずつ無料で配った。

熊本県からの支援職員の一入として、東松島市役所に派遣されていた八代市企画政策課の宮川武晴さん(45)も配布作業を見守った。「感想を聞くと、仮設住宅には当たったが、床に何も敷いてないのが、畳が欲しくて来たという人は